

作成日	2025 年 6 月 20 日
学科名	データサイエンス学科

自己評価：S・**A**・B・C

**評価項目① 過年度からの改善・向上の取り組み**

- (ア) 質保証の客観性・有効性を高めることを目的として、令和 6 年度に全学科で実施を依頼した、学生が参画した FD について、そこで得られた成果・課題について記載してください。
- (イ) 昨年度の自己点検・評価において各組織で記述した課題・改善方策や、内部質保証推進会議からの提言を踏まえ、現時点における取り組み状況・成果について記載してください。

**参照資料**

- ・ 過年度の FD 実施報告書
- ・ 令和 6 年度点検・評価シート
- ・ 令和 6 年度内部質保証推進会議からの提言
- ・ 卒業時アンケート（大学）
- ・ ジェネリックスキル測定テスト
- ・ 資格取得や進路就職状況
- ・ 各種会議の議事録等

**【現状分析】**

- (ア) データサイエンス学科は令和 5 年度に設置審査を経て新学部として発足し、令和 8 年度の完成年度に向けて、現在は 1 回生から 3 回生までの学生が在籍している。令和 9 年度以降の学習者主体の新カリキュラム構築に向け、在学生のニーズを把握し、より良いカリキュラム作成につなげることを目的として、令和 6 年 7 月 17 日に FD を実施した。参加者は、データサイエンス学科の全教員と、2 回生 5 名、1 回生 3 名の学生である。カリキュラム構築に関する議論に加え、設置初年度より実施している学生と教員の対話・学びの場「DS Café」の効果についても話し合った。
- (イ) 昨年度の自己点検・評価で指摘された課題の一つに、学生受け入れに関連するデータサイエンスの啓発活動があった。これを受け、データサイエンスへの関心を高め、とくに女子中高生や保証人に対して選択率を向上させることを目的に、学科の学生による「DS 学生キャラバン隊」を編成した。

**【成果】**

- (ア) 令和 6 年度に行った学生参加型の FD では、現行カリキュラムおよび科目に関して、「講義・演習は丁寧に行われており、満足度が高い」との学生の意見が得られた。また、DS Café については、令和 6 年度より上級生が下級生からの質問に答える形式を採用しており、学生間の学び合いを促進する体制が整っていること、さらにその学習効果が確認された。
- (イ) 啓発活動として編成された DS 学生キャラバン隊は、オープンキャンパスにおける「DS 体験コーナー」において、高校生に対して学生が直接指導することで、データサイエンスに関する実習を通じた効果的な啓発を実現した。また、令和 6 年 12 月 17 日に京都橘高等学校で実施された「高校分野別ガイダンス」では、2 回生 2 名と教員が参加し、学生から大学での授

業内容や学びの実際を紹介することで、データサイエンスへの理解促進が図られた。さらに、これらの取り組みに加えて、学修成果の一環として「統計検定2級」に2名、「基本情報技術者」に3名の学生が合格するなど、資格取得においても顕著な成果が見られた。

**【課題】**

- (ア)FDの実施を通じて、現行カリキュラムにおいては「科目の統合などによるスリム化が望ましい」と教員・学生双方が感じていることが明らかになった。さらに、科目間の内容の共有が不十分であり、学年間・学年内における学習内容の整合性を取ることを今後の課題である。
- (イ)データサイエンスの志願者は男性が圧倒的に多く(男女比が9:1程度)、高等学校におけるガイダンス参加者も同様に男性が中心である。そのため、女子中高生への働きかけを含め、どのような方法で啓発活動を行うかが今後の重要な課題となっている。

**【改善・発展方策】**

- (ア)FDの実施により、現行カリキュラムの課題が明確になった。この結果を受けて、今年度より、令和9年度以降の新カリキュラム構築を目指したワーキンググループを発足させる。
- (イ)DS学生キャラバン隊の活動をさらに強化し、オープンキャンパスでの企画の充実や高等学校への直接訪問などを通じて、データサイエンス学科主体の啓発活動をより積極的に展開していく。さらに資格取得者を増やすことはデータサイエンスの啓蒙にもつながるため、教員と学生が共に学ぶ場である「DS café」において統計検定の勉強会を実施するなど、自主的な学びを促す取り組みも行う。

自己評価：S・A・B・C

<p><b>評価項目② カリキュラムの適切性と成果</b></p> <p>(ア)DP、CPに基づき、体系的な履修を促すカリキュラムとなっているか、記述してください。</p> <p>(イ)カリキュラムにおける常勤、非常勤の担当教員のバランスは適正か、記述してください。</p> <p>(ウ)DPの達成につながる学修成果を得られているか、ジェネリックスキル測定テストや卒業時アンケート結果等を分析・活用して、検証してください。</p>
<p><b>参照資料</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・カリキュラムマップ、ツリー</li> <li>・単位修得要領</li> <li>・シラバス</li> <li>・科目群別非常勤教員比率</li> <li>・ジェネリックスキル測定テスト</li> <li>・卒業時アンケート（大学）</li> <li>・その他参照した資料（京女ポータル・シラバス参照）</li> </ul>

**【現状分析】**

- (ア)DP・CPに基づき、データサイエンスを構成する3領域（数理・統計系科目、社会ソリューション科目、情報系科目）の基礎から発展までを段階的に学べるカリキュラムとなっている。1年次には、各領域の入門的な科目を配置し、基礎的な知識を丁寧に習得する。専門科目は1年次から段階的に積み上げる構成となっており、データアナリシス力、データエンジニアリング力、領域知識・価値創造力という3つのスキルを修得できるよう、幅広い講義科目が体

系的に配置されている。

- (イ) データサイエンス専門科目 162 科目のうち、非常勤教員が担当するのは 20 科目であり、割合は 12.3%である。
- (ウ) ジェネリックスキル測定テスト（1 回生のみ）の結果において、論理的思考力を測る「リテラシー総合」は、私立大学（女性）および本学平均よりも高い数値を示した。一方で、社会人としての即戦力を測る「コンピテンシー」は本学平均よりは高いものの、私立大学（女性）にはやや劣る傾向が見られた。他方、こうした課題を踏まえ、本学科では外部ゲストスピーカーによる講義や企業・自治体への現場見学など、PBL を取り入れた授業を積極的に実施し、実践的な学びを充実させている。

#### 【成果】

- (ア) カリキュラムについては、DP・CP と各授業科目との関係性をカリキュラムマップとして可視化しており、カリキュラム全体の構造を示すカリキュラムツリーも作成している。これらはオリエンテーション等で解説することで、学生が体系的に履修できるよう支援している。さらに本学科ではアカデミック・カウンセリングを通じて全学生に対して個別面談を実施しており、履修に関する指導も行っている。
- (イ) 非常勤教員担当科目の割合は 12.3%であり、他学部と比較しておおむね低く保たれている。
- (ウ) ジェネリックスキル測定テストの結果は完成年度前であり経年変化の把握には至っていないが、データサイエンスにおいて重要な論理的思考力である「リテラシー総合」が高い点から、一定の教育効果が認められる。また、授業「データサイエンス実践概論」の一環として、京都済生会病院より外部ゲストスピーカーを招いた講義を実施したところ、学習環境や教員・学生の質の高さに対して高い評価のご感想をいただくなど、学外からも本学科の教育内容に対する信頼が寄せられている。さらに、授業「データサイエンス基礎演習」では、京都府、塩野義製薬、京セラなどさまざまな企業・自治体の現場見学を行っており、2 回生とは思えないほどの積極性や理解力の高さについて、各訪問先から高い評価を得ている。このように、学内外の多様な学びの機会を通じて、教育の質と学生の成長が着実に実を結んでいることがうかがえる。

#### 【課題】

- (ア) カリキュラムは 3 領域を体系的に配置しているが、科目間での学習内容の整合性をさらに高める必要がある。
- (イ) 社会ソリューション科目や情報系科目では、数理・統計系科目に比べて非常勤教員の担当割合が高く、領域ごとのバランスに偏りが見られる。
- (ウ) データサイエンスには社会課題の解決能力が求められるが、その前提となる「コンピテンシー」のさらなる向上が課題である。

#### 【改善・発展方策】

- (ア) 完成年度後に向けた新カリキュラム構築においては、科目間の整合性を高めるための科目統合等も含め、検討を進めるワーキンググループを発足させる。

- (イ) 現在、教員組織の充実を進めており、不足する分野については非常勤教員が補っている。将来的には非常勤教員のバランスの偏りが解消される見込みである。
- (ウ) PBL、アイデアソン、ハッカソンなどへの学生の参加を奨励し、実践的な課題解決を通じて「コンピテンシー」の向上を図る。関西大阪万博でのアイデアソンや、京都スマートシティ EXPO の関連イベントにおけるアイデアソン・ハッカソンへの参加も予定している。また、外部ゲストスピーカーの講義や企業の現場見学などを通じて、PBL に関する授業内容のさらなる充実を目指す。

自己評価：S・**A**・B・C

<p><b>評価項目③ 成績評価</b></p> <p>(ア) 成績分布は、教員間で評価のバラつきが生じていないか。また、学科において検証・調整されているか記載してください。</p> <p>(イ) 成績評価、フィードバック等がシラバスに基づき適切に実施されているか、学修行動調査やALCS学修行動比較調査等の結果（評価の公平性の学生満足度）から検証し、記載してください。</p>
<p>参照資料</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・各科目の成績分布</li> <li>・学修行動調査の成績評価に関する設問</li> <li>・ALCS学修行動比較調査（1・3回生）の「69. 評価のされ方」満足度結果</li> </ul>

**【現状分析】**

- (ア) シラバスにおいては、成績評価および単位認定の客観的な基準が明記されている。評価は、数学系の講義科目においても1回の筆記試験のみに依存せず、授業への取り組み、授業内外での演習やレポートの提出状況、試験の得点などをもとに、定量的かつ多角的に実施している。成績分布に関しては、最頻値が概ね「S」または「A」となっており、一部の科目を除き大きなバラつきは見られない。また、学科会議にて各教員に成績分布を共有し、成績評価のばらつき低減の重要性について共通認識を持つよう促している。
- (イ) 成績評価が適切に実施されているかについては、学修行動調査の成績評価に関する設問において、「適正に評価されている」「自己評価より高い評価であった」と回答した割合が全学平均を上回っている一方、「科目によりばらつきがある」との回答は全学の中で最も低い割合となっている。

**【成果】**

- (ア) データサイエンス学科発足後の2年間において、成績分布に大きな変動はなく、教員間の評価のバラつきも特段の変化は見られていない。
- (イ) 成績評価に関する設問における「適正に評価されている」との回答割合は、2回生・3回生ともに約57%であり、年次による大きな差異は認められなかった。

**【課題】**

- (ア) 演習科目において、教員間の成績分布に顕著なバラつきが見られる科目がある点が課題である。これらの科目は、1つの授業に対して複数のクラスが設けられており、クラスごとに学習内容がやや異なっていることが要因と考えられる。

(イ)成績評価に関する設問における「科目によりばらつきがある」との回答は、2回生が13%、3回生が9.5%と、年次により若干の変化が見られた。専門科目が増える2回生以降では成績評価の一貫性が高まる一方、1回生では複数クラスの科目が多く、成績評価にばらつきが生じやすいと考えられる。この点は(ア)と同様、複数クラス開講科目における課題である。

**【改善・発展方策】**

(ア)成績分布の情報を教員間で共有し、特定科目における評価のバラつきを抑制することの重要性について、改めて共通認識を促す。特に複数クラスで開講されている科目については、成績評価基準を教員間で共有し、評価の均質化を図る。

(イ)とくに1回生の演習科目においては、複数クラス間で成績評価の基準を統一するよう働きかけ、評価の公平性と一貫性を確保する。